

久留米大学

比較文化研究所年報

第2号

2008

比較文化研究所年報 第2号 (2008年度)

目 次

はじめに	1
比較文化研究所の概要	2
活動報告	
1. 研究部会報告	
1) 欧州研究部会	5
2) 外国語教育研究部会	7
3) 健康文化研究部会	8
4) 地域博物館研究部会	8
5) 福祉コミュニティ研究部会	10
6) 文化財保存科学研究部会	12
7) 民事法研究部会	15
8) 地域社会・文化・経済研究部会	15
2. 筑後川流域圏の総合研究 (旧三潴地域研究)	17
3. 社会連携研究「健康・生きがいのあるまちづくり」	19
4. 研究員発表会	21
5. 日誌 (運営会議、研究所会議等)	23
施設・設備	24



は じ め に

比較文化研究所長 浅見 良 露

昨年度に比較文化研究所年報を発刊して、今年度で第2号になります。毎年前年度の比較文化研究所の活動状況を報告し、また、多くの方々に比較文化研究所を知っていただく目的で発刊しております。

比較文化研究所は、1987年に設立以来、2007年に20周年を迎えました。

設立当初は、文系学際大学院「比較文化研究科」を設置するための母体として、大学院比較文化研究科の研究機能を受け持ち、所員もまた、専任所員および大学院比較文化研究科後期博士課程教員に限られていましたが、近年は、大学での研究成果の地域や社会への還元が求められる中、2006年度に「筑後川流域圏の総合的研究」を、2007年度に、文部科学省私学振興高度化事業である社会連携研究「筑後川流域圏における産学官民協働と地域コミュニティ開発に関する研究～健康と生きがいのあるまちづくりを中心に～」をスタートさせ、比較文化研究所の研究成果の地域への還元、さらには、久留米大学と地域との連携強化を図っております。

第2号は、2008年度の活動状況を中心に掲載しております。本年報を通じて、比較文化研究所と地域や社会との交流・連携がさらに広がることを期待します。

2009年12月

比較文化研究所の概要

比較文化研究所は、1987年に久留米大学付属の研究所として創設されました。

研究所の目的は、「新しい学際的統合を基本理念として、文化の構造と機能に焦点を当てた総合的比較文化研究を行うこと」（比較文化研究所規程）であり、学問領域を超えて学際的な研究の推進を図ることを目指すものであります。

設立当初は、文系学際大学院「比較文化研究科」を設置するための母体として、大学直属の研究所として設置されました。大学院比較文化研究科の研究機能を受け持つという性格上、専任所員及び大学院博士課程比較文化研究科後期課程の教員のみによって組織されており、研究所長もまた、比較文化研究科委員長（当時、現在の比較文化研究科長にあたる）が兼任しておりました。

その後2001年において、研究所の組織が改正され、比較文化研究所に、大学での研究成果を地域や社会へ還元するという役割が加わりました。それに伴って、組織も変更され、比較文化研究所所員も、大学院担当教員を中心に、その他の希望する専任教員にまでその枠が広がられました。

まず、2006年度より、研究成果の地元地域への還元を意図して地元である筑後川流域圏を対象地域とした研究を行うというプロジェクト研究「筑後川流域圏の総合研究（大川研究）」を開始しました。2006年度～2007年度においては、大川地域における研究が行われ、2008年にその第1回の研究報告書「大川市の地域研究」を発刊しました。また同時に、大川市における報告会も開催いたしました。さらに、2008年からは、研究対象地域を旧三潞郡に移して、「筑後川流域圏の総合研究（三潞研究）」さらに研究を進めております。この研究は2009年度までの2年計画で行い、2009年度末には、研究報告書を発刊する予定です。

また、文部科学省が進めている私立大学学術研究高度化推進事業のなかで社会連携研究推進事業に、比較文化研究所は大型研究プロジェクト「筑後川流域圏における産学官民協働と地域コミュニティ開発に関する研究－健康生きがいのあるまちづくりを中心に－」（代表保坂恵美子、研究分担者15名、研究期間5年間）の申請が認められ、2007年度からスタートしました。

いずれの研究事業も、比較文化研究所の研究成果の地域への還元、さらには、久留米大学と地域との連携強化を図るものであります。平成20年度においては、次のような組織・体制となっております。

組織体制

所 長 浅見 良露（経済学部教授と兼任）

専任所員 森 醇一郎（教授）

行實 鉄平（講師）

客員教授 鈴木 廣

所 員 77名（専任所員2名（上記）、

客員教授1名（上記）、

大学院比較文化研究科後期博士課程の教員29名、
大学院心理学研究科後期博士課程の教員 7 名、
任意に加入する助教以上の教員38名)

特別研究員 1名

研 究 員 35名

専任所員は、講師以上の教員となり、任期制をとっております。

所員は、専任所員、大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のほか、大学院心理学研究科後期博士課程の教員および任意に加入する助教以上の教員により構成されています。

研究体制としては、「研究部会」を置き、各研究部会長が研究活動の中心として研究活動をリードしています。2008年度における研究部会は以下の通りです。また、各研究部会の研究活動を次項以下に示します。

- 1) 欧州研究部会（部会長 児玉 昌巳 教授）
- 2) 健康文化研究部会（部会長 吉水 浩 教授）
- 3) 外国語教育研究部会（部会長 李 偉 講師）
- 4) 福祉コミュニティ研究部会（部会長 保坂 恵美子 教授）
- 5) 民事法研究部会（部会長 東 孝行 教授）
- 6) 文化財保存科学研究部会（部会長 狩野 啓子 教授）
- 7) 地域博物館研究部会（部会長 森 醇一郎 教授）
- 8) 地域社会・文化・経済研究部会（部会長 大矢野 栄次 教授）

研究員は、後期博士課程を修了した者が、その後も研究を続け、博士の学位論文の作成を目指すというものです。2008年度は、35名の研究員が在籍しており、指導教員の指導の下、各自の専門分野の研究を行っています。

議 決

比較文化研究所における議決組織として、主として次の2つの議決組織があります。

運営会議：所長、専任所員、研究部会長、所員の代表からなる組織で、2008年度は合わせて16名の運営委員で構成されています。研究所の運営に関する中心的な議決機関となります。

研究所会議：所長、専任所員、所員全員からなる組織で、規程、運営方針、予算、人事等に関する決定を行います。

また、学部などとの必要な連絡調整を図り、研究所の円滑な運営を期するため、研究所協議会が置かれています。協議会は、所長、学部長、専任所員の教授を含む所員の教授5名によって組織されています。

おもな活動

比較文化研究所の活動は、研究部会の活動および研究所の活動に分かれます。

本年度の活動については次項以下を参照ください。

研究成果の公表

『比較文化研究』

研究所の紀要として『比較文化研究所紀要』第 1 輯を 1987 年に発行しましたが、その後 1993 年発行の第 14 輯からは『比較文化研究』と紀要名を改称しています。毎年 2 輯ずつ刊行していますが、2008 年度は投稿数が少なかったため第 42 輯と第 43 輯の合併号となりました。第 42・43 輯(合併号)の目次は以下の通りです。

『比較文化研究』第 42・43 輯(2010 年 3 月発行)

研究ノート 吉田 洋一「亀井南冥年譜考」 pp.1-24

研究活動報告 保坂 恵美子「健康生きがいのあるまちづくり(ゆにばひろば)」における参加者の意識について pp.25-53

資料 張 国興「東アジアの貿易・投資・安保関連日誌－2008 年 1 月～6 月－」 pp. 55-116

各研究部会等の研究成果の公表

また、各研究部会などにおいても出版物をはじめとする研究成果の発表が行われておりますが、これらの成果については、各研究部会等の報告(後述)をご参照ください。

さらに、研究員については、平成 18 年度から、年度末の 2 月に、研究員研究発表会を行い、その年度における研究成果の発表が行われています。

『比較文化研究所年報』の刊行

比較文化研究所における 1 年間の研究成果の報告および比較文化研究所の学外への周知を目的に、2008 年度(2007 年度の報告)より刊行を開始した。

筑後川流域圏の総合研究(三潞研究)

久留米大学は、筑後川流域圏の中央部に位置するが、久留米大学の位置する筑後川流域圏を研究し、さらにその成果を地域に還元しようとするものである。本研究は 2006 年度より開始している。現下のところ、下流域から上流域へ 2 年単位で研究を進めている。2006～2007 年度においては、筑後川河口付近の大川市を中心とした地域を対象とし、2007 年度末に『大川地域研究』を刊行した。2008 年度は、研究対象地域を、筑後川を少しさかのぼった旧三潞郡(久留米市三潞町、久留米市城島町、三潞郡大木町)を中心とした地域を対象に、研究を進めている。2009 年度末に、その成果をとりまとめ、報告書を刊行する予定である(詳細は別項参照)。

社会連携研究「筑後川流域圏における産学官民協働と地域コミュニティ開発に関する研究～健康生きがいのあるまちづくりを中心に～」

大学と地域社会との連携を目的として、2007 年度より、文部科学省の助成事業としてスタート、2008 年度においては、「健康」「生きがい」「ライフスタイル」をテーマとし、各世代を通じた交流研究を行い、「子ども・子育て」をテーマとした「ゆにばひろば」を実施した。(詳細は別項参照)。

活動報告

1. 研究部会報告

1) 欧州研究部会

2008年度欧州部会は以下の要領で、3名の講演者を招き、大学と本学アクロス福岡サテライト教室において、公開の講演会を実施した。

なお、パリ政治学院のクリスチャンルケンヌ教授については、西日本新聞が08年5月23日付で、同社井手記者が、講演当日、インタビューし、クリスチャンルケンヌ教授の講演の様子を写真入りで、少し遅れて、掲載した。

第1回

講師：Christian Lequesne クリスチャン・ルケンヌ博士

(パリ政治学院・ロンドン大学経済学部教授)

演題：「EUの拡大と国際的な影響」

通訳 八谷まち子 (九州大学准教授)

司会 児玉 昌己 (久留米大学法学部国際政治学科教授)

日時：2008年4月17日木曜日 13時～15時 (内質疑応答30分)

会場：久留米大学福岡サテライト

(福岡県福岡市中央区天神1-1-1 東オフィス5階)

第2回

日時：平成20年7月19日(土)、午後3時30分より5時

場所：112番教室(100号館一階)

講演題目：D. H. ロレンス：「関係性」の文学

講演者：鈴木俊次愛知学院大学教授

講演者略歴：1946年生まれ。名古屋大学大学院博士課程満期退学後、天理大学、金沢大学を経て、現在愛知学院大学文学部教授。著書に『キーワードで読むロレンス—関係性の視点から』(鷹書房、2007)、編著に『D. H. ロレンスとモダニズムの作家たち』(英宝社、2003)、『第1次大戦とイギリス文学—ヒロイズムの喪失』(世界思想社、2006)などがある。第1回日本英文学会新人賞授賞(1978年。授賞論文「D. H. ロレンスの海—初期と後期の詩に探る」)。現在、日本ロレンス協会の会長。

講演要旨：ロレンス文学にとって「アダムとイヴ」の関係、さらには、「人と宇宙(ユニバース)」の「関係性」が極めて重要である。第一次大戦を経たロレンスにとって「創造」と「破壊」の相対立する要素の微妙な関係性を小説作品で描くことが必然であったことを、当時のエッ

セイ「トマス・ハーディ研究」と『虹』や『恋する女たち』との関わりの中で明らかにする。

第 3 回

講 師：梅津 實（同志社大学法学部教授）

講演者略歴：1940年生まれ

1967年同志社大学大学院法学研究科修了

現在同志社大学法学部教授

主要著書：『新版：比較・選挙政治』（共著）ミネルヴァ書房2004年

『政治腐敗からの再生』（共編著）成文堂2008年

その他、論文多数

専門分野：現代イギリス政治史・議会政治論

演 題：「二院制か、一院制か？～イギリス議会の経験を通して考える」

司会 児玉 昌己（久留米大学法学部国際政治学科教授）

日 時：2009年1月30日金曜日 15時～17時（内質疑応答含）

会 場：久留米大学福岡サテライト

（福岡県福岡市中央区天神1-1-1 東オフィス5階）

（文責 児玉 昌己）

EU拡大の意味と未来は？

「E.U.の旧東欧への拡大は成功したのか」

（〇七年までに加盟した旧東欧の十カ国は、E.U.に成長をもたらした。新規加盟国は70%が旧東欧で、安定的な労働力を確保し、投資も呼び込んでいる。ただ、ドイツやフランスの自動車産業などはチェコ、スロバキア、ポーランドなどに部品工場を移転。旧東欧国内で労働者の不満が出ている。一方、E.U.内の人の移動は自由なので、例えばポーランドからは〇四年の加盟以来、英国に八十万人、アイルランドに十万人の労働力が流入し、経済に貢献している。しかし、多くは技能を持たない単純労働者。居住国の労働力が不足すると、社会問題の要因になる可能性もはらんでいる。

「労働力については域外からの移民の問題もある。『働き手が不足している』から移民を必要とする。移民を正統化する措置をとっているのに対し、フランスやスペインやイタリアは、アフリカなどからの不法移民を正統化する措置をとっていない。さらに、これま



1962年、フランス北東部マルヌ県生まれ。専門は欧州建設。ストラスブール政治学院やベルギーの欧州大学院大を経て、パリ政治学院教授。2006年からロンドン大学客員教授も務める。

パリ政治学院教授
クリスチャン・ルケンヌさん

各国の差認め平和構築

「E.U.の旧東欧への拡大は成功したのか」

（〇七年までに加盟した旧東欧の十カ国は、E.U.に成長をもたらした。新規加盟国は70%が旧東欧で、安定的な労働力を確保し、投資も呼び込んでいる。ただ、ドイツやフランスの自動車産業などはチェコ、スロバキア、ポーランドなどに部品工場を移転。旧東欧国内で労働者の不満が出ている。一方、E.U.内の人の移動は自由なので、例えばポーランドからは〇四年の加盟以来、英国に八十万人、アイルランドに十万人の労働力が流入し、経済に貢献している。しかし、多くは技能を持たない単純労働者。居住国の労働力が不足すると、社会問題の要因になる可能性もはらんでいる。

「労働力については域外からの移民の問題もある。『働き手が不足している』から移民を必要とする。移民を正統化する措置をとっているのに対し、フランスやスペインやイタリアは、アフリカなどからの不法移民を正統化する措置をとっていない。さらに、これま

で採決で全会一致の賛成が必要だった案件に、多数決制が多く導入され、政策決定の迅速化が図られる。E.U.は今後、さらに拡大していくのか。

「既にクロアチアと加盟交渉に入っており、五年以内にマケドニア、モンテネグロ、ボスニア、そして独立宣言したコソボといった国が加盟申請するだろう。これらのバルカン諸国は今も不安定だが、加盟を目指すことで民主主義を推進させ、経済も活性化されるのではないかと、一方、加盟すればドイツに次ぐ人口を持つトルコも交渉しているが、各国の国内論議とも絡み、めどは立っていない。

「拡大は欧州にとってどんな意義があるのか。

「E.U.の真意は第二次大戦後のドイツとフランスの和解にあり、平和こそ第一の目的。その意味で拡大は欧州の安定をより強固にする方策だ。一方、いろんな歴史や文化を持つ国が入れれば、欧州が一体化した安定な建設は難しくなる。安定的な一体化からは遠ざかるというシナリオだ。この問題の解決には域内に区別を設けることができないと思う。多様な制度について、参加する国と参加しない国を認めるのが、現状でも適当なE.U.を採用しているのは数以上の三カ国だ。ただ、各国の差を認めることで一層二層といった階級が生れることだけは避けたい。」

2) 外国語教育研究部会

外国語教育研究部会は、外国語教育のバックグラウンドの人間教育をモットーに、毎年外国語語学、文学と教育のみならず、その周辺分野の異文化コミュニケーション、異文化理解、人間関係など幅広い課題を取り上げ、専門的な研究者を講師に、教員及び地域住民を対象にした講演会を実施している。

2008年度は、上述した視点から持続可能な社会と学校教育をテーマとする講演会を実施した。講師として聖心女子大学の永田佳之先生にお願いした。参加者は本学教員及び学外計15名であった。

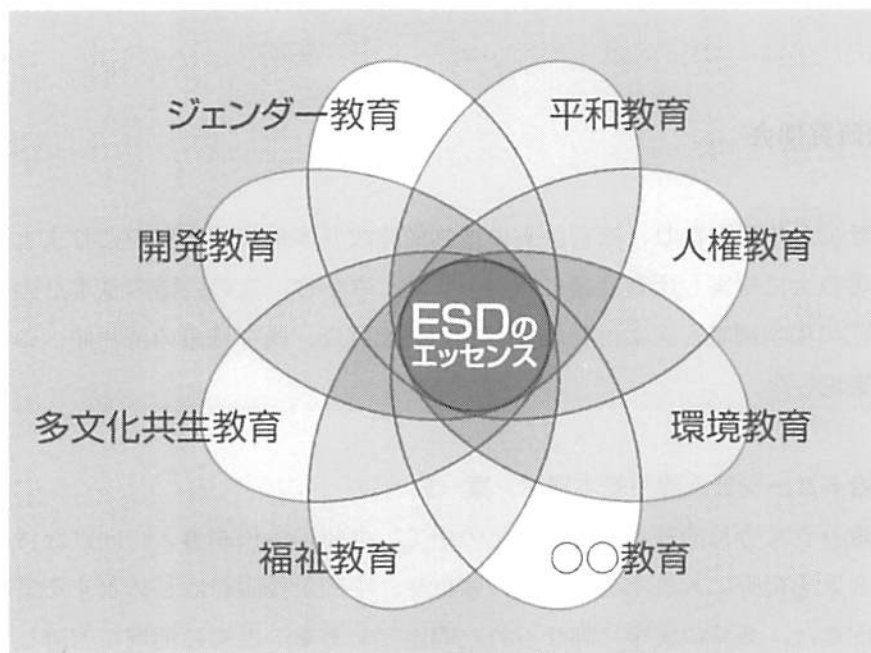
演 題：持続可能な社会と学校教育：ESDを通した教育の捉え直し

講 演 者：永田 佳之（聖心女子大学教育学科）

日 時：平成20年10月4日 土曜日14：00～17：00

場 所：久留米大学御井キャンパス メディアセンター6F 第2AV教室

講演内容：



出典：ESD-Jリーフレット（2007）

2005年から日本の市民と政府の提唱により、国連「持続可能な開発のための教育」（ESD）の10年が始まり、欧州やアジア各地で持続可能な未来に向けた教育実践が生まれている。ESDは従来の環境教育とは異なり、自然環境のみならず、社会や経済との〈つながり〉の再考をも迫る新たな概念で、私たち市民一人ひとりのチャレンジであると言える。講演では、ESDが誕生した背景やその思想、各国の現状や課題を伝え、またイギリスや中国でのESDの実践校を写真を交えて紹介した。さらにアクティビティを通して、従来の学校教育のあり方を改めて問い直す機会にできた。

講演者は、2008年ラオスとタイ、パラオ、バングラデシュ、モンゴルのESD実践を調査し、アジアの人々の声を集めてきた。その成果やアジアの最新事情も紹介した。

（文責 李 偉）

3) 健康文化部会

健康文化部会は、これまで毎年健康の保持・増進、健康づくりおよびスポーツ活動や競技力向上に関する身近な課題を取り上げ、専門的な研究者を講師にして、教職員・学生および地域住民を対象にした公開講演会を実施してきた。

2008年度は、上述の観点から近年受療率が毎年増加傾向にある高血圧を取り上げ、その予防・改善のためのメカニズムおよび定期的な運動が果たす効果に関する講演、および高齢者の運動の実施と継続に関する留意点をテーマとした公開講演会を実施する計画であったが、予定した講師との日程の調整がつかず残念ながら実施できなかった。

2009年度からはこれまでの公開講演会に替わって、久留米や九州の地域を中心とした広範囲に渡った医学・医療の定着・発展に関する歴史的背景について、資料の収集や分析による研究活動を実行することになっている。

(文責 吉水 浩)

4) 地域博物館研究部会

《活動報告》

部会を発足させて3年目となり、当初計画の博物館建設基本構想(案)のとりまとめを行い、比較文化研究所運営委員会に提案し所員会議に報告をした。さらに、次の段階の基本計画の策定のため、九州の地域博物館の現状調査と医系博物館の展示の実態調査、既存施設の博物館への再利用と展示手法の現状調査を実施した。

《久留米大学総合ミュージアム建設基本構想—案—》

久留米大学を取り巻く今日的な社会環境の変化の中で、九州の道州制導入に向けた将来展望の必要性から九州・沖縄8県を視野に入れた広報活動の強化や、中国と韓国をはじめとするアジアからの留学生の受け入れの促進は、多くの大学に課せられた問題でもある。とくに地域に密着して展開する大学においては、地域文化の掘り起こしとその継続は大学のもう一つの課せられた役割でもある。

そこで、これらの課題の方策の手段として、オープンキャンパスの常設化による大学情報の発信と、寄贈・寄託資料の受け入れや学内の研究成果の集約による積極的な文化広報活動の導入のため、文系博物館と医系博物館を整備し、データバンクとしての博物館の構築と創造的人材育成のために、久留米大学総合ミュージアムの設置計画を試みる必要がある。その基本的理念を「博物館を手段として文化広報活動の構築による久留米大学の九州及びアジア戦略」とし、御井キャンパスに文系博物館を旭町キャンパスに医系博物館を設置して久留米大学総合ミュージアムを構築する。

文系博物館には、久留米大学の過去の歴史と今日の成果の現状と将来の展望を集約した開学80周年記念館」や、九州各県の博物館の現状とその時々博物館・美術館の活動の情報を提供する「九州の博物館等情報館」、九州が置かれている地理的環境から文化の影響が大きかった中国大陆と朝鮮半島の文化の影響を比較した「比較文化研究館」、筑後川が作りあげた特色ある文化と風土を集約した「筑後川流域博物館」、寄贈・寄託された資料や美術品及び九州一円の若手芸術家の育成のための作品公開の

場である「久留米大学ギャラリー館」等が考えられる。

医系博物館には、先史時代から今日に至る人々の生命に関係する多くの営みと久留米大学医学部の開設時から現在までの発展過程を追った「生命の科学館」と、現在開設されている医学部の教育内容を解説した「医学部講座科目館」、併設されている付属病院に構成されている診療内容を示す「付属病院診療科目館」、日進月歩の医学界において久留米大学が取り組んでいる最新の医科学的技術と治療技術の開発の現状を示す「先端医学館」、日頃の健康維持とスポーツとの関わりの実験が可能な「健康とスポーツ科学館」等の構成が考えられる。

《調査及び視察》

・九州の地域博物館の現状調査

宮崎県北部に所在する高千穂町立歴史民俗資料館（コミュニティーセンター）、竹の資料館、延岡市立内藤記念館（民俗資料展示室）、西郷隆盛宿陣跡資料館、日向市立歴史民俗資料館（美々津まちなみセンター）、若山牧水記念館、南郷村韓の館、椎葉民俗芸能博物館（椎葉村歴史民俗資料館、椎葉焼畑資料館）、沖縄県平和祈念館、ひめゆり平和記念資料館、沖縄美ら海水族館、今帰仁村歴史文化センター等の施設と展示について、調査と視察を実施した。

とくに椎葉民俗芸能博物館は、九州産地の四季の生活とその時々演技られる素朴な民俗芸能を、系統だった資料の収集と分類から展示が構成されており、学芸員の資料の収集能力と解析能力を如実にものがたる博物館で、博物館としての中規模程度であるが、ここから発信される地域の情報量は大きく優れており、九州の地方博物館を代表する施設といえる。今帰仁村歴史文化センターは世界歴史遺産に指定されている沖縄グスクの一つの今帰仁城の登城口に建設されているサイトミュージアムで、グスクからの出土品と地域に残されている生活道具である民俗資料から構成されている。この歴史文化センターには年間約30万人の入館者があっており、沖縄を代表するグスクと年間300万人をこえる入場者のある美ら海水族館が近接する地理的条件は、見逃すことはできない。

・医系博物館の展示の実態調査

川崎医科大学付属現代医学教育博物館、北里大学付属北里柴三郎記念室、愛知健康ランド（健康開発館・健康情報館・健康科学館）、名古屋市科学館、愛知県歯科医師会歯の博物館等の施設と展示手法の調査と視察を実施し、医系博物館の基本構想策定の参考とした。

岡山県倉敷市に所在する川崎医科大学付属現代医学教育博物館には、比較文化研究所長他4名で視察した。医学関係の標本資料を多く所蔵している医系博物館として北海道の札幌医科大学と共に知られており、標本作製から展示まで大学独自で実施され、その充実した陣容は今後開設される医系博物館には参考になる。現代医学教育博物館の設立の目的として「医学教育の基本は、教師の充実した講義と学生の自発的読書にあることは、今も昔も変わりません。しかし現代の若人たちは、幼い頃からテレビ・漫画に馴染んで育ち、その大きな影響を受けています。これらの現実を踏まえ、画像に慣れ親しんだ現代の学生たちが学習しやすいように、豊富な実物標本と視聴覚教材を揃えた、〈第2の実物図書館〉、〈動きを見る図書館〉とも言うべき現代医学教育博物館を建設しました」とうたっている。

その施設の構成は 1 階が工作資材エリアで展示資料作製の中心部で、ここで作製された展示品が 2 階の一般に公開されている健康教育博物館と 3 階と 4 階の学生のための学習フロアで公開される。

単科の医系博物館は多く存在するが総合的な医系博物館は少なく、川崎医科大学現代医学教育博物館は大変参考になる博物館といえる。健康とスポーツの視点から、健康開発館と健康情報館と健康科学館から構成されている「あいち健康プラザ」は参考となろう。

・既存施設の博物館への再利用と展示手法の現状調査

国立科学博物館、東京大学総合研究博物館（小石川分館）の調査を行い、既存施設の博物館への再利用と限定された展示面積での展示手法の実際の視察を行なった。

（文責 森 釀一郎）

5) 福祉コミュニティ研究部会

平成20年度福祉コミュニティ研究部会では、以下の2つの研究・活動課題に取り組んだ。

研究・活動課題名

- I. 久留米市における子ども・子育て支援マップの制作研究活動
- II. 絵本 こうらさんものがたり『こうごいしはみてござる』の制作研究活動

以下に、この2つの研究・活動課題の成果についてまとめる。

I. 久留米市における子ども・子育て支援マップの制作研究活動

1 目的

本研究では、子どもが健康に育つ社会、子どもを生み、育てることに喜びを感じることでできる社会を目指すべく、久留米市における子ども・子育てに関する社会資源に関する実態調査を行い、幼子を養育する地域住民が活用できる支援マップを作成することを目的とした。

2 研究委員

- 保坂 恵美子 久留米大学文学部教授（研究委員長）
- 大西 良 久留米大学文学部助教（研究委員長補佐）
- ポドリヤク ナタリヤ 久留米大学大学院比較文化研究科学生（研究委員）
- 許 莉分 久留米大学大学院比較文化研究科学生（研究委員）
- 藤島 法仁 久留米大学大学院比較文化研究科学生（研究委員）

3 研究委員会開催日

平成20年 6 月23日（月） 第1回研究委員会 研究計画の検討

平成20年 7 月14日 (月)	第 2 回研究委員会	研究スケジュール・手続きの検討
平成20年 8 月 4 日 (月)	第 3 回研究委員会	研究報告①
平成20年 9 月29日 (月)	第 4 回研究委員会	研究報告②
平成20年10月13日 (月)	第 5 回研究委員会	研究報告③
平成20年10月27日 (月)	第 6 回研究委員会	研究報告④
平成20年11月10日 (月)	第 7 回研究委員会	研究報告⑤
平成20年11月24日 (月)	第 8 回研究委員会	研究報告⑥
平成20年12月15日 (月)	第 9 回研究委員会	研究のまとめ

4 まとめ

久留米市における子ども・子育てに関する実態調査を実施した。その結果を踏まえ、『久留米市子ども・子育て支援マップ』をほぼ完成させた。今後は、関係機関および団体等に配布する予定である。

II. 絵本 こうさんはみてござる『こうごいしはみてござる』の作成研究活動

1 目的

地域の歴史や文化に対する理解を深め、家族や地域の絆を深め、子どもたちの地域アイデンティティ形成の一助とするため、地域に伝わる民話を素材にした絵本を作成し、絵本の読み聞かせを通じて子育て支援や地域文化の伝承活動を行うことを目的とする。

2 編集委員

浅見 良露	久留米大学比較文化研究所長 (編集委員)
保坂 恵美子	久留米大学文学部教授 (編集委員長)
大矢野 栄次	久留米大学経済学部教授 (編集委員)
川野 栄美子	ブッククラブ大川、久留米大学比較文化研究所研究員 (作詩)
近藤 日子	西部水彩画協会会員 (絵)
竹間 高麿	高良大社宮司 (編集委員)
岩坂 浩子	ゆにばひろば事務局員

3 編集委員会開催日

平成20年10月24日 (金)	編集委員会事前打ち合わせ・編集委員について
平成20年11月 3 日 (月)	第 1 回編集委員会発会式 基本方針と内容の検討
平成20年11月16日 (日)	第 2 回編集委員会 作詩第 1 回目の検討
平成20年12月19日 (金)	第 3 回編集委員会 作詩第 2 回目の検討
平成21年 1 月24日 (土)	第 4 回編集委員会 作詩第 3 回目の検討
平成21年 2 月12日 (木)	第 5 回編集委員会 絵第 1 回目の検討
平成21年 2 月23日 (月)	第 6 回編集委員会 絵第 2 回目の検討

平成21年 3 月13日（金）第7回編集委員会 作詩第4回目・絵第3回目の検討

4 まとめ

平成21年度の“ゆにばひろば”の特別企画、こうらさんものがたり『こうごいしはみてござる』の絵本の編集をほぼ完了した。

（文責 保坂 恵美子）

6) 文化財保存科学研究部会

平成20年度文化財保存科学研究部会では、以下のような活動を行ったので報告する。また、その成果は各学会等での発表をおこなった。本報告では、その中でも5月17・18日に行われた文化財保存修復学会第30回記念大会の資料を提示する。

(1)2008年度活動記録（部会員は氏名のみ）

- 4 月 文化財保存修復学会第30回記念大会で、研究部会の研究成果を発表することが決定され、準備を開始した。口頭発表は、上宮健吉・狩野啓子・堂前亮平の連名。ポスター発表は、狩野啓子・上宮健吉・宮原信孝の連名で行うことに決定。発表用ポスターの構成と印刷は原口雅浩が担当。
- 4月11～19日 松枝哲哉氏が、東京の和光並木館において個展「筑後の風を織る」を開催。その中でプロジェクトチームが開発したクララ和紙を一部使用した紙布も夏帯として展示された。
- 5月16日 防虫和紙プロジェクトの解説を上宮健吉が文化財保存修復学会エクスカーションで行う。（松枝哲哉氏の工房藍生庵にて）
- 5月17・18日 文化財保存修復学会第30回記念大会が太宰府市で開催された。ポスター発表は、2日間九州国立博物館のエントランスホールで実施。口頭発表は、18日に太宰府市中央公民館で上宮健吉が代表して行った。口頭発表「保存用記録紙として防虫効果の高いクララ和紙について」（上宮健吉・狩野啓子・堂前亮平）。ポスター発表「化学薬剤を用いない防虫保存用品の開発」（狩野啓子・上宮健吉・宮原信孝）。
- 6月19日 部会研究会。株式会社長沼の長沼氏、林原研究所の福田センター長が来訪。御井図書館3F 筑後文化資料室作業室で、研究会と懇談会を実施。桑野剛一が、藍菌研究についてのプレゼンテーションを行った。林原研究所における藍研究についての福田氏のプレゼンテーションも聴講。その後、藍生庵訪問に同行した。
- 6月27日 上宮、八女伝統工芸館に赴き、中原稔彦氏からクララ和紙を受領。
- 7月2・8日 上宮、福岡の中野三敏氏宅で研究材料の収集。
- 7月12・13日 阿蘇白水の下碓牧野組合に依頼して、牧場内のクララを10名で採取。溝田俊和氏、試作用に持ち帰る。松枝哲哉氏・小夜子氏、木綿布のクララ染め実験に取りかかる。
- 8月1日 部会研究会
上宮に九州国立博物館より客員研究員の依頼。（2008年8月1日～2010年7月31日）
「文化財害虫の飼育、観察、記録をとおして生態を把握する」ことが依頼の目的である。
上宮（研究所特別研究員）に、比較文化研究所会議室横の別室の使用が許可された。
- 9月5・6日 狩野がソウルの韓国国立古宮博物館で開催された東アジア紙文化財保存修理シンポジウムに参加。

9月18日 上宮がクララとキハダの本格的抽出を開始、分子生命研の大沼雅明氏の協力。その他に百部根、イチヨウ葉エキスなどの煮熟による抽出も行う。

10月7日 部会研究会。「ブックオカ」の記事掲載のため、3名のスタッフが研究会の前に上宮を取材。

10月28日 「ブックオカ」(西日本新聞)の「必殺ブック仕事人! 四天王伝説」に下記のタイトル付きの記事が掲載された。

- ・虫に食われぬ長寿紙をつくる「本の虫」王。上宮健吉さん
- ・キングの名言「紙を遣せば、文化が遣る」
- ・害虫・シバンムシによって失われた古文書や書物は数知れず。
- ・紙メディアで次世代に文化を伝える夢はクララ和紙に託される。

11月4日 久大エンタープライズと打合せ。部会より「筑後優品(仮称)」の提案。

11月30日 部会研究会で八女・田主丸方面見学会を実施。

八女の溝田和紙とクララ栽培の近藤氏、田主丸の松枝氏(藍生庵)を中心に、ビデオ撮影を行いながら、見学。

12月9日 筑後文化資料室作業室を400号館3階に移動。和紙・保存布・保存箱関係の資料は、この作業室に保管。

12月23日 筑後優品の構想に着手。

松枝工房ほか 溝田和紙 松延工芸 服部提灯などの製品が、現時点での候補。
漆塗り、竹細工、彫金、彫刻なども今後検討。

2009年

2月12日 狩野が久留米市長を訪問。プロジェクトの内容を説明。

2月14日 部会研究会

桑野・大沼・上宮・狩野 発表

2月19日 狩野が大英博物館修復部平山スタジオを訪問。矢野英子外国語教育研究所講師が英語通訳として協力(2月26日のクイリナーレ訪問まで)。

2月20日 レディング大学(Reading University)を訪問。

EU諸国で展開された大型プロジェクトSPINDIGOのリーダーであるフィリップ・ジョン教授(Philip John)を訪問。

2月25日 バチカン美術館修復部紙部門を訪問。

2月26日 イタリア国立修復中央研究所(Instituto Centrale per Il Restauro)を訪問。

2月26日 クイリナーレ(Quirinale 旧王宮 現大統領官邸)美術室を訪問。

2月26日 ローマ大学を訪問。

3月2日 筑紫野市民大学で狩野が「ローマで見てきたこと」と題して、バチカン美術館やローマ国立修復研究所訪問の経験について講演。

3月15日 九州国立博物館で久留米大学比較文化研究所文化財保存科学研究部会・九州ミュージアムIPM研究会第3回合同研究会を開催。

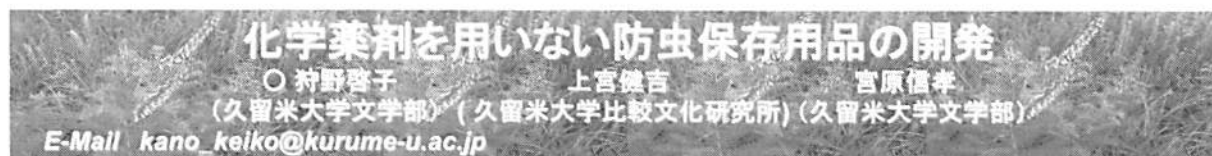
3月19日 狩野が松枝哲哉氏の案内で、大木町の松枝家を訪問。松枝氏の両親にインタビュー。教育学習支援センターの酒井さん同行。その後「藍生庵」を訪問。

3月28日 狩野が釜山大学伝統服飾研究所を訪問。

3月30日 溝田俊和氏と狩野が八女市長を訪問。プロジェクト研究について説明。

(文責: 狩野 啓子)

(2)文化財保存修復学会 第30回記念大会ポスター発表資料



はじめに

文化的な価値のある紙資料に大きな被害をもたらすものに昆虫類がある。文化財保存に燻蒸殺虫処理が難しくなった現在、それに代わる方法が求められている。そこで、毒性のある化学薬剤を使用する燻蒸等の方法ではなく、害虫が忌避する成分を保有する植物を利用して、保存用品を製作することを試みてきた。

最初の発想は、紙を護る紙の開発である。古人は、ある種の植物を用いて害虫から身を守っていた。試作したクララ紙や藍染布の顕著な防虫効果を確認することによって、単なる復古趣味ではない将来への展望を確信するに至った。

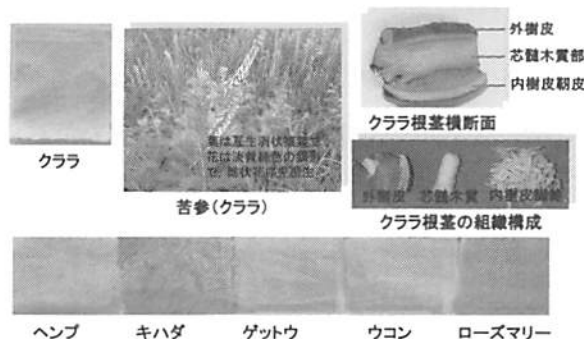
Ⅰ 伝承(情報)の収集

文献とインターネットの情報等を収集して検討した。また、棟方志功に板画紙を提供してこられた八女市在住の高山栄一氏をはじめとして、複数の専門家へのインタビューにより、貴重な情報を得ることができた。

Ⅱ 防虫保存用品の試作

1. 保存用和紙

八女伝統工芸館の中原稔氏に依頼し、基本紙料のコウゾにヘンプ、キハダ、ゲットウ、クララ、ウコン、ローズマリー等を漙き込んだ和紙を製作した。最後に、最も防虫効果の期待できる植物として苦参(クララ)に着目し、クララ和紙の製作も依頼した。



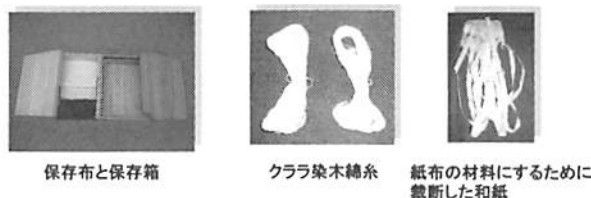
古代の和紙の復元を目指すものではなく、あくまで防虫効果を有する和紙の製作を目的として、複数の製法により製作した。

2. 保存布

久留米市在住の藍染織の専門家である松枝哲哉氏に依頼し、藍染めとウコン染めの保存布を製作した。

3. 保存箱

八女市在住の松延新治氏に依頼し、桐と楠製の保存箱を製作した。



謝 辞 実験の遂行にあたり、九州大学名誉教授 中野三敏先生、久留米大学医学部長 赤須崇先生、八女伝統工芸館 中原稔氏、国指定重要無形文化財久留米紙技術保持者 松枝哲哉氏、松延工芸 松延新治氏、久留米大学医学部 桑野剛一先生、久留米大学医学部生物学教室 小田えり子氏には終始多大のご指導とご協力を頂きました。ここに記して深く感謝の意を表します。

Ⅲ 試作和紙の防虫効果実験

普遍的な紙料としてのコウゾは実験的には防虫機能の低い和紙である。試作した和紙や古書に対して、シバンムシ類を実験に用いて防虫効果を比較した。

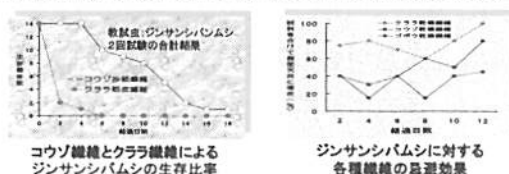
1. シバンムシの収集

古書収集の専門家のご理解を得て、2006年6月に数千頭の虫の捕獲に成功し、実験の第一歩を踏み出した。その後は、養殖にも成功した。



2. 生態観察と忌避実験

発表者の1人で、昆虫学の専門である上宮健吉が、シバンムシの生態観察と各種和紙に対する忌避・放飼実験を行った結果(5月18日(日)14:00~14:15発表 セッションⅥ 保存用記録紙として防虫効果の高いクララ和紙について)参照)、害虫の忌避効果は和紙に漙き込む植物によって大きな差があり、防虫効果の高い和紙は文化資料の積極的な保存に供することができるという結論に達した。



Ⅳ さらなる展開

1. 藍菌の検証にむけて

藍は古来より、防虫、防菌、毒蛇から身を守るといった様々な効能が伝えられている。藍の染織家は、「藍は生きている」ことを経験的に知っているが、根本の働きは藍菌によるものであるという。その藍菌を、科学的に検証するための第一歩として、「藍の発酵菌の培養とその形状」を発表した(桑野・松枝・狩野 2008 久留米大学比較文化研究所文化財保存科学研究部会・九州ミュージアムIPM研究会 第2回合同研究会)。



2. 染色材料としてのクララ

古くは「延喜式」に、染色材料としてのクララの記述が見られる。2007年7月に上宮健吉が提供したクララの枝と葉を用いて、松枝哲哉氏は木綿糸を黄色に染めることができた。また、クララ染めの後に藍染めを施した絹布は、鮮やかな緑色に染まった。

クララで染めた黄色の糸を幾筋か藍の中に織り込んだ作品「星合い」は、クララ和紙を横糸にして藍糸に織り込んだ紙布の作品「涼風」とともに、「松枝哲哉 絨展 筑後の風を織る」(2008年4月11日-19日 和光並木館)に展示された。

7) 民事法研究部会

民事法研究部会は、平成17年4月20日開設を認められて以来、比較文化研究科に兼任として担当する者のみならず、法学部、法科大学院に籍を置く者をも含めて11名の教員によって構成され、平成17年4回、同18年3回の研究会を開催して、なかには優れた研究として評価を得たものもありまして、活気がありました。

ところが、平成19年においては、法科大学院における第三者評価の対応の関係上、本研究部会の開催はありませんでしたが、次年度以降は、研究会の開催を復活する予定であります。

(文責 東 孝行)

8) 地域社会経済研究部会

平成20年度の地域社会経済研究部会の活動報告としては、久留米大学学外公開講座（えーるピア久留米）での講座主催、そして、海外（台湾）の大学での講演、国内での講演会について報告することができる。

1. 公開講座

えーるピア久留米において、6月15日から7月6日までの毎週日曜日に世界と日本の経済・政治の情勢について4人の講師によって下記のスケジュールによって講演した。

演 題	講演者氏名	所 属	開講日	会 場
アフガンと世界	宮原 信孝	文学部教授	6月15日（日）	えーるピア久留米
パキスタンと世界	古賀 幸久	法学部教授	6月22日（日）	
ヨーロッパと世界	児玉 昌己	法学部教授	6月29日（日）	
日本と世界	大矢野 栄次	経済学部教授	7月6日（日）	

また、経済学部産業経済研究所との共催というかたちで、久留米大学公開講座を御井キャンパス500号館1階51A教室において、下記の要領で開催した。

5月15日（木） 葉山 アツコ 「フィリピンと日本」

5月22日（木） 松石 達彦 「東南アジアと日本」

5月29日（木） 畠中 昌教 「ヨーロッパと日本」

6月5日（木） 大矢野 栄次 「アメリカと日本」

この内容については、今後、各自論文として発表する予定である。

2. 海外講演会

海外の講演については、台湾の呉鳳大学において、呉鳳大学学長や理事長参加のもと200人の参加者のもとで、児玉昌己教授が「アジアにおいてEUを学ぶことの意義」と題して講演した。また、南

台科技大学の研究会において、南台科技大学副学長参加のもとで、台湾の大学関係者100人の出席の下で、大矢野栄次（経済学部）教授が「教育と産業界をいかに架橋するか」において基調報告をした。具体的内容は、下記の通りである。

①講演発表 呉鳳大学 平成20年11月29日（土曜日）

児玉 昌巳 「アジアにおいてEUを学ぶことの意義」

②講演発表 南台科技大学(台湾) 平成20年（2008年）11月1日

大矢野栄次 「教育と産業界をいかに架橋するか」 論文集として出版

また、経済学部産業経済研究所の予算を利用して、平成20年11月29日（土曜日）に台湾の呉鳳大学において、下記の内容の講演発表を行った。

大矢野栄次 「日本の観光の歴史について」

3. 国内講演会

国内の講演会としては、平成21年2月1日から2月15日までの毎週日曜日に九州王朝の歴史や日本経済の現状、アメリカ発の金融危機について講演した。具体的内容は、下記の通りである。

①平成21年2月1日

「壬申の乱九州説－奈良に行ったこともない、天智天皇と天武天皇」

②平成21年2月8日

「小泉改革は正しかったのか？－今後消費税は？」

③平成21年2月15日

「アメリカ金融危機と世界経済」

以上の活動を基にして目下論文作成中である。

これ以外の講演会としては、産業経済研究所の予算を利用して、以下のような講演会を行った。

①平成21年1月31日 大川市中央公民館 大矢野栄次

「風浪宮の歴史と大川市」

②平成21年2月14日 みやま市 大矢野栄次

「大川新幹線の可能性と筑後の将来について」

③平成21年2月14日、21日、28日（筑後市）

「金融危機と世界経済、その後の筑後の経済開発」

（文責 大矢野 栄次）

2. 筑後川流域圏の総合研究（三潴研究）

1) はじめに

2006年度より開始された「筑後川流域圏の総合研究」は、比較文化研究所の地域貢献事業として各部会事業とは別に位置づけられているものである。対象地域は「大川」「三潴」「久留米」「浮羽」「日田」の5周辺地域。筑後川を川下から川上へと2年ベースで対象地域を移動する計画となっている。2008年度は、「筑後川流域圏の総合研究1 大川研究」を発行、大川市学所で報告会を行い、最初の対象地域であった大川市に1つの区切りをつけることができた。そして、旧三潴郡（大木町、三潴町、城島町）を対象地域とし、新たな地域での総合研究を進めていくこととなった。今後は、2年間の研究期間とし、旧三潴郡の地域研究（以下、三潴研究と示す）を行っていくことになるが、まずは1年目にあたる本年度は「参加所員の募集」⇒「対象地域の特徴を知る」ことからスタートした。

2) 三潴研究

(1) 現地視察の実施

大木町、三潴町、城島町の地域特徴（特性）を知るために、平成20年6月6日（金）、現地視察を実施した。大木町では、企画調整課の岡崎なつき氏、三潴町では、久留米市三潴総合支所地域振興課の合戸泰博氏、城島町では、久留米市城島総合支所地域振興課の下津浦丈弥氏の協力を得ることができた。視察参加者は10名。視察先の詳細は下記に示すとおりである。

表 1 現地視察の視察先

大 木 町	三 潴 町	城 島 町
1 大木町就業改善センター	1 三潴公民館・体育館	1 城島町総合文化センター
2 大木町総合体育館	2 200年記念の森・福祉の森ゆうゆう	2 榊花の露
3 水辺公園	3 ため池群	3 久留米市天文台
4 大木テクノバック・アスバラガス集荷場	4 十連寺公園・西牟田古墳	4 城島リバーサイドゴルフ場
5 おおき循環センター「くるるん」	5 三潴の黒松	5 下田の渡し
6 R442バイパス	6 ポッポ汽車・弓頭神社	6 六五郎橋下河川敷
7 大木町石丸山公園	7 御廟塚古墳	7 今村慎一鬼瓦向上
8 天然温泉大木の湯「アクアス」 物産館「がんばらん館」	8 八之江・三井寺揚水所	8 R385号線
9 大木町健康福祉センター	9 かんがい排水路・親水公園	9 掘割
10 大木町役場	10 久留米市三潴総合支所	10 久留米市城島総合支所

(2) プロジェクトメンバー

本プロジェクトメンバーは、現地視察を終え、対象地域に興味関心を持った教員により構成することとしている。その結果、9名の教員が同プロジェクトメンバーとして構成された。各教員の所属と

専門領域の詳細は下記に示すとおりである。

NO	氏 名	所 属	職 名	専 門	テ ー マ
1	畠中 昌教	経済学部	講 師	観光学概論・エコツーリズム論	酒造業と観光
2	吉田 洋一	文学部	講 師	日本近代史・日本史学概論	三潞地方の近世・近代
3	行責 鉄平	比較文化研究所	講 師	スポーツ経営学・コミュニティスポーツ論	三潞町の地域スポーツ振興とまちづくりの関連性
4	谷口 豊	商学部	准教授	経営史・比較経営論	三潞・城島地区における酒造業の現段階
5	駄田 井正	経済学部	教 授	経済学史・ポスト工業社会論	旧三潞郡地域における自然との共生度
6	浅見 良露	経済学部	教 授	経済地理・観光地理学・地理情報システム論	筑後川下流域における水系網及び土地利用の変化
7	狩野 啓子	文学部	教 授	日本文学・日本近代文学・比較文学	大木町における藍染織の歴史－松枝家を中心に－
8	大矢野栄次	経済学部	教 授	国際貿易論・近代経済学説史・経済政策	筑後川と有明海の歴史に見る帰化人の痕跡
9	堂前 亮平	文学部	教 授	地誌学・人文地理学	旧三潞郡における在郷町の地域変容

(3)三潞研究会の開催

本年度は、「対象地域の特徴を知ろう」ということで、主に旧 3 町の行政担当者を演者としてお招きし、各地域の歴史や文化、施設、最近の取り組み等についてご講演いただいた。参加者は各回によって異なるが比較文化研究所に所属している教員をはじめ、筑後川流域圏の地域研究に興味・関心を持つ学生（大学院生）の参加もあり、10～20名の方々に参加していただいた。

- 第 1 回 日 時 9 月 17 日（水）16 時 30 分～18 時
場 所 比較文化研究所 会議室（100 号館 3 棟 2 F）
テーマ 「大木町の特徴について」
演 者 大木町 町長 石川 潤一
- 第 2 回 日 時 11 月 26 日（水）18 時 30 分～20 時
場 所 比較文化研究所 会議室（100 号館 3 棟 2 F）
テーマ 「三潞地域の特徴について」
演 者 三潞総合支所 地域振興課 主査 合戸 泰博
- 第 3 回 日 時 12 月 3 日（水）18 時 30 分～20 時
場 所 比較文化研究所 会議室（100 号館 3 棟 2 F）
テーマ 「城島地域の特徴について」
演 者 城島総合支所 地域振興課 主任主事 下津浦 丈弥
- 第 4 回 日 時 12 月 17 日（水）18 時 30 分～20 時
場 所 比較文化研究所 会議室（100 号館 3 棟 2 F）
テーマ 「旧三潞郡の地域研究の成果と課題」
演 者 久留米大学 経済学部 教授 伊佐 淳

(4)今後の展開

来年度は、参加教員がそれぞれのテーマで調査を開始し、研究会（各教員による中間報告会）の開催と、報告書となる「筑後川流域圏における総合研究 2 三潞研究」の発行を目指す。

（文責 行責 鉄平）

3. 社会連携研究「健康・生きがいのあるまちづくり」

第 2 回健康生きがいのあるまちづくり “ゆにばひろば”

『子ども・子育てフェア』

— 筑後川流域圏における産学官民協働と地域コミュニティ開発に関する研究 —

筑後川水系と広い平野に恵まれた筑後川流域圏は、かつては豊かな穀倉地帯として流域住民の暮らしの基盤となっており、そこには三世代同居家族と密度の濃い近隣ネットに支えられた農村地帯が広がっていた。ところが、戦後の産業化・都市化に伴う都市型核家族の増加や農村家族の兼業化・離農・脱農などによって、流域住民の子育てや高齢者介護等が困難化し、近所づきあいの希薄化なども促進されている。

筑後川流域圏のこのような現状をふまえ、家族や地域の絆を見直し、親から子、子から孫への地域文化の語り継ぎと地域社会の世代間交流の促進等が重要課題となっている。このような認識に基づき、「第 2 回健康生きがいのあるまちづくり “ゆにばひろば（大学広場）”」の焦点を「子ども・子育て支援」に求め、「子ども・子育て」をキーワードとする家族と地域の絆づくりを、産（産業）・学（大学）・官（行政）・民（住民）協働のシステムづくりを通じて行うことを本年度の課題とした。

「子ども・子育てフェア」の開催日は平成 20 年 9 月 20 日（土）、時間は午前 10：00 から午後 4：00 まで、開催場所は久留米大学御井学舎、学生会館 1 階～3 階であった。また、午後 4 時以降は、大学と地域との連携という視点から、久留米市御井校区まちづくり振興会や同合川校区コミュニティセンターなど、地元住民が主催している『久留米大学駅前フェスタ』に合流し、大学と地域住民との親睦・交流も行った。

本年度の事業内容は、午前中のテーマ部会が「地産地消で健康生活」、午前・午後のテーマ部会が「親子孫みんな笑ってまちづくりっ隊」となっており、「地産地消…」では JA くるめによる野菜即売会や伝統食品のバザーなどが行われた。また、「…まちづくりっ隊」では午前中は「赤ちゃんハイハイ（赤ちゃんレース）」、午後は掛橋孝行氏・岩見りえ氏によるオカリナ・エレクトーンの演奏、上旗保育園児のお遊戯「かさじぞう」、久留米落語長屋（四カ所十郎氏）による「寄席」、合川校区手品愛好会による「手品」など、0 歳から 80 歳代までどの世代もが主役となれる多世代交流のひろばづくりが行われた。

特に、イベントのハイライトは「赤ちゃんハイハイ」と「かさじぞう」のお遊戯で、会場は親・きょうだい・祖父母・応援団・見物人の区別なく、声援・爆笑入り乱れての熱気あふれるイベントとなった。このイベントを通じて、赤ちゃん・子どもは家族の絆であるばかりでなく、地域の絆でもあることを実感することができ、まちづくりの焦点に「子ども・子育て」をおいたことの正当性を確認できた。

また、今回のイベントは、久留米大学御井学舎に地域の赤ちゃん・子どもたちを初めて迎え入れた記念すべきイベントでもあり、これを迎えた学生たちの赤ちゃん像にも、「かわいい」「無邪気」「癒される」「将来わたしも赤ちゃんがほしい」など、赤ちゃんへの肯定的なイメージが膨らんだイベントでもあった。少子化時代における未来の父親・母親たちの子生み・子育ての一助になればと考えるのは、

欲張りであろうか。

“ゆにばひろば”では、以上のような特別企画の外、行政とNPOによる健康相談・栄養相談・子育て相談・離乳食相談などが行われた。また、会場の各フロアでは、プールボールや紙ひこうき、風船アート、紙しばい、子供の絵本の読み聞かせ、巨大迷路、子どもの昔遊び（折り紙、あやとり、折り紙、お手玉、コマ、剣玉、シャボン玉）など、学生・市民・ボランティアなどによる「あそびひろば」が開設され、大人といわず、子どもといわず、参加者たちは童心に帰って昔遊びを満喫し、心に豊かさを取り戻した一日であった。



家庭に子どもや孫のいない世帯が増加するなかで、家庭内での昔遊びや子どもの遊び道具にふれる機会をなくした人々が多い。このような人々（学生・市民・高齢者等）が“ゆにばひろば”で昔遊びに興じたり、子どもの遊び道具にふれ、童心に帰った気分になれることは、心の健康づくりにとって有効といえるであろう。また、普段、テレビやパソコン・インターネット・携帯・メールなど、言葉を発しなくてもよい世界で一人で過ごすことの多い子どもたちにとっても、人と人との直接的なふれあいや言葉を交わす機会の多い“ゆにばひろば”は、コミュニケーション能力や人間関係形成能力などを高める場として有効といえるであろう。

“ゆにばひろば”の参加者の意識やその評価については、久留米大学比較文化研究所比較文化研究第42・43輯、保坂恵美子外「第2回健康生きがいのあるまちづくり（ゆにばひろば）ー子ども・子育てフェアにおける参加者の意識について」、及び、久留米大学文学部研究紀要第9号、大西良外『福祉系学生における子ども・子育てに対するイメージ～健康生きがいのあるまちづくりフェスタ（子ども・子育てフェア）に参加した学生のアンケート分析を通じて～』に報告しており、関心のある方はこちらも参照して頂きたい。

また、本年度の産学官民協働のシステムづくりについては、主催は久留米大学比較文化研究所、共催は久留米大学文学部社会福祉学科と筑後川流域圏地域づくり何でも相談会であり、後援には、久留米市、大川市、久留米市社会福祉協議会、久留米市生きがい健康づくり財団、JAくるめ、久留米市合川校区コミュニティセンター、久留米市御井校区まちづくり振興会、久留米落語長屋、久留米市消費者連絡協議会、NPO法人子育て支援ボランティアくるるん、NPO法人栄養ケアちっこ、ブッククラブ大川、久留米大学文学部・経済学部・商学部・法学部、久留米大学BBS、久留米大学KOS、久留米大学愛恵会、西日本新聞社、くーみんテレビなどの機関や団体等にお世話になった。

お世話になった方々には、この場をお借りして心よりお礼申し上げる次第である。

（文責 保坂 恵美子）

4. 比較文化研究所 研究員 発表会

1) はじめに

久留米大学比較文化研究所では、研究員制度を設けており、現在35人の研究員が所属しています。研究員諸氏は当然ながら各自の研究テーマに沿って研究を進め、その成果は各自の所属する学会等で発表しているわけですが、2006年度から比較文化研究所にも発表の場を設けました。これは、比較文化研究所の研究員として、どのような研究がなされているかを研究所として把握することと、研究員の方々が研究発表を通じて研究の発展をはかることを目的としたものです。

本年度は第3回目の研究発表会となります。昨年度に引き続き研究発表会のプログラムや研究発表の要旨を入れた冊子を作成しました。研究発表要旨は、一人1ページとし、より研究の中身が分かるように充実させました。発表者は20名。2会場で実施となりましたが、各会場での質疑応答も活発に行われ、内容のある発表会となりました。



2) 発表会の日時、会場、タイムスケジュール及び発表形態

①日 時 平成21年2月18日(水) 10:00~16:00

②会 場 久留米大学(100号館3棟2F:比較文化研究所会議室、ゼミ室)

③タイムスケジュール

- | | |
|-----------------|-------------------|
| (1) 9:30~ 9:50 | 受 付 |
| (2) 9:50~10:00 | 開会挨拶(比較文化研究所 会議室) |
| (3) 10:00~12:00 | 研究発表4演題 |
| (4) 12:00~13:00 | 昼 食 |
| (5) 13:00~16:00 | 研究発表6演題 |
| (6) 16:00~16:10 | 閉会挨拶(比較文化研究所 会議室) |

④発表形態

1人20分(口頭発表15分 質疑5分)

2~3演題毎に座長を交代する(1座長:1時間程度で時間調整)

演者の他に、座長、時間係、ベル係を置く(座長、時間係、ベル係は、研究員で行う)

3) 発表演題一覧

平成20年度 比較文化研究所 研究員研究発表会

演題一覧

第 1 会場：100号館 3 棟 2 F 比較文化研究所 会議室						
NO	役割	発表者	演 題	時 間	専門	指導教員
グループ①	1 座長②	譚 寧	中国における自動車企業の経営資源の構図と戦略に関する研究 －企業競争優位としての「資源ベース」の視点から－	10:00～10:30	経済	徳増 典洪
	2 時間・ペル②	龍 騰	持続可能な社会のための企業環境経営の構築 －中国の環境経営の実現にむけて－	10:30～11:00	経済	徳増 典洪
グループ②	3 座長③	阿古 拉	中国の水問題	11:00～11:30	経済	大矢野英次
	4 時間・ペル③	吉松亜希子	大川市に関する基礎的研究	11:30～12:00	経済	大矢野英次
昼休み						
グループ③	5 座長④	浦川 康弘	「地産地消」と持続可能な地域づくり	13:00～13:30	経済	駄田井 正
	6 時間・ペル④	阿 思根	何か違うか？「要望書」・「F A T」・〈対話〉 ～文化経済学の視点から見たもの～	13:30～14:00	経済	駄田井 正
グループ④	7 座長⑤	長濱 文与	協同作業の認識が学習意欲におよぼす影響	14:00～14:30	心理	安永 悟
	8 時間・ペル⑤	陳 宥蓉	東アジアの循環型社会の構築についての考察と課題	14:30～15:00	経済	藤田 八輝
グループ⑤	9 ー	羽山 順子	乳児の睡眠習慣形成を目的とした親訓練が、養育行動、 および母子の睡眠と母親の健康に及ぼす影響	15:00～15:30	心理	津田 彰
	10 ー	伊藤 桜子	職域における W E B 環境を利用したメンタルヘルスチェックの 効果	15:30～16:00	心理	津田 彰
第 2 会場：100号館 3 棟 2 F ゼミ室						
グループ①	11 座長②	方 大年	中国における特色ある都市づくりの推進に関する考察 －長春市コリアタウンを事例として－	10:00～10:30	文学	堂前 亮平
	12 時間・ペル②	佐田 亜紀	天神縁起に描かれた六道	10:30～11:00	文学	江頭 肇
グループ②	13 座長③	幣旗佐江子	『雨月物語』『吉備津の釜』磯良像を求めて	11:00～11:30	文学	江頭 肇
	14 時間・ペル③	岸川 郁子	日本近世の漢詩文研究 －中国文化から日本文化へ・勝景詩歌を中心として－	11:30～12:00	文学	江頭 肇
昼休み						
グループ③	15 座長④	三浦幸一郎	梅園哲学の比較文化論	13:00～13:30	文学	江頭 肇
	16 時間・ペル④	顧 紅英	太宰治文学における「愛」の構造	13:30～14:00	文学	江頭 肇
グループ④	17 座長⑤	橋口 公子	浮舟の物語について	14:00～14:30	文学	江頭 肇
	18 時間・ペル⑤	平川 彩子	中国語話者の日本語の漢字理解におけるコンテキストの効果	14:30～15:00	文学	長澤 澄子
グループ⑤	19 ー	藤村 一郎	吉野作造の朝鮮論	15:00～15:30	政治	張 国興
	20 ー	胡 蔽	信用保証協会の経営判断と背任罪について －平成16年9月10日北国銀行背任事件最高裁判決の意義－	15:30～16:00	法学	宗岡 嗣郎
ー	21 ー	王 彦風	日本大学生の消費行動と消費意識 －九州の四つの大学における調査から－	ー	経済	駄田井 正
ー	22 ー	夏 広軍	筑後川まるごとバーパーク －持続可能性と地域の取組－	ー	経済	駄田井 正
ー	23 ー	今村 義臣	生と死の関連性について －捨身施への共感における死生観と死に関する経験の影響－	ー	心理	木藤 恒夫
ー	24 ー	羊 又夫	煎茶についての変遷	ー	文学	崎村 弘文
ー	25 ー	占部 匡英	日本語教育史における入門期教科書の基礎語彙研究	ー	文学	崎村 弘文
ー	26 ー	謝 君慈	福岡県都市地域における幼児の知覚環境形成 －ショッピングの機能を持つ要素を事例に－	ー	文学	堂前 亮平
ー	27 ー	徳永 武将	真崎基三郎と二・二六事件の関係 ～軍内対立の再検討～	ー	文学	江頭 肇

(文責 行實 鉄平)

5. 日誌 (2008年度)

2008年 (平成20年)

- 4月23日 (水) 比較文化研究所運営会議
- 4月30日 (水) 比較文化研究所会議
- 6月18日 (水) 比較文化研究所運営会議
- 7月2日 (水) 比較文化研究所会議
- 8月29日 (金) 「筑後川流域の総合研究(大川研究)」発表会(大川市)
- 9月20日 (土) 「第2回 健康生きがいのあるまちづくりフェスタ～子ども・子育てフェア～」
- 10月1日 (水) 比較文化研究所運営会議
- 11月19日 (水) 比較文化研究所運営会議
- 12月3日 (水) 比較文化研究所会議
- 12月17日 (水) 比較文化研究所運営会議

2009年 (平成21年)

- 1月7日 (水) 比較文化研究所運営会議
- 1月21日 (水) 比較文化研究所会議
- 2月5日 (木) 比較文化研究所協議会
- 2月5日 (木) 比較文化研究所運営会議
- 2月18日 (水) 比較文化研究所研究員研究発表会
- 3月10日 (火) 比較文化研究所運営会議

※部会活動を除く

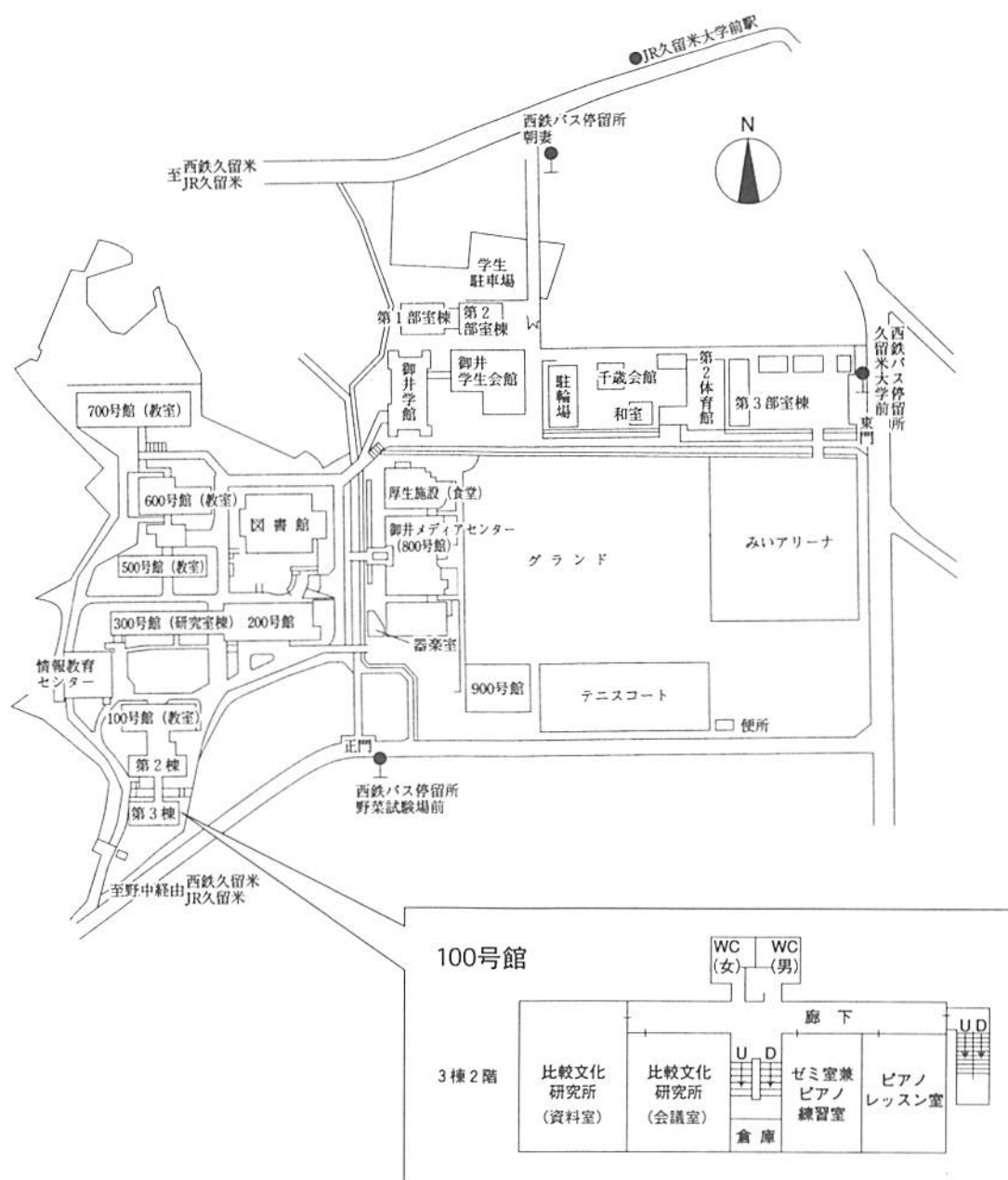
施設・設備

比較文化研究所は、1987年の設立当初は、旭町キャンパスの大学本館3階に設置されたが、大学院比較文化研究科が開設された1989年に、旭町キャンパスから御井キャンパスに移動した。その後数回の移動を経た後、2006年に100号館の現在の位置に移動している。研究所の部屋は2部屋あり、1部屋は会議・研究会に使用、他の1部屋は資料室および作業室として使用している。なお、専任所員の研究室は、300号館にある。

研究所の資料室には、紀元前3世紀に不老不死の薬を求めて渡来したとされる「徐福」に関する膨大な図書が保管されている。これは、元サガテレビ副社長内藤大典氏（故人）が収集された図書である。現在、図書の整理を進めているところであり、この方面の研究の発展に寄与するものと期待される。



久留米大学（御井学舎）比較文化研究所 案内図



久留米大学 比較文化研究所年報 第2号

著作権所有

不	許	複	製
禁	転	載	

平成21年12月15日 印刷
平成21年12月25日 発行 第2号

編集兼 久留米大学比較文化研究所
発行者 〒839-8502 久留米市御井町1635

印刷所 多田印刷株式会社
〒830-0037 久留米市諏訪野町四丁目2432